

転炉スラグを活用したイネ稲こうじ病対策

粉状転炉スラグ（以下、SL）を10a当たり300～800kg水稻の移植前圃場に土壤混和し、農薬を適期施用することで、稲こうじ病の高い被害軽減効果が得られる。施用圃場では土壤の交換性石灰と交換性苦土の含有量が高まった。

内容

稲こうじ病は、収穫期のイネ^{もみ}に暗緑色の病粒が形成される病害で、多発生すると減収や品質低下の原因となる。その伝染源は病粒を形成する厚壁胞子の小塊で、土壤中で発芽し、イネの根の細胞間隙から侵入すると考えられている。防除適期は穂ばらみ期で、銅（以下、Cu）剤やシメコナゾール（以下、SM）剤による防除がなされる。しかし、降雨が多い年には散布適期を逸したり、薬剤が流亡したりして効果が得られないことがあった。

そこで、本病の農薬による防除効果を安定させるため、カルシウムやケイ酸および鉄を豊富に含む資材であり、アブラナ科野菜の根こぶ病など土壤病害に対する被害軽減効果が知られている転炉スラグに着目し、施用試験を行った（写真）。

まず、中発生圃場にSL800kg/10aを移植前に土壤混和すると、処理区の病粒数は0.03個/株と無処理区の23%となった（データ略）。



写真 転炉スラグの散布作業

次に、多発生圃場で、移植前土壤混和SL300kg/10aと、穂ばらみ期のSM剤又はCu剤を単独または併用して施用した。その結果、SL区で株当たり病粒数は0.4個/株と無処理区の0.8個/株の50%となり、併用したSL+SM区は0.1個/株と、SM区の0.2個/株を下回った（図）。

また、無処理区とSL区の穂ばらみ期の土壤分析では、SL区の交換性石灰・苦土の土壤含有量が無処理を上回った（データ略）。

普及上の留意事項

- ①土壤が良く乾いた条件で圃場に均一施用し、十分な碎土・混和を行なう。
- ②転炉スラグの効果を安定させるために、多肥を避ける。
- ③高い被害軽減効果を得るために農薬と併用し、その防除適期を守る。

内橋 嘉一（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）

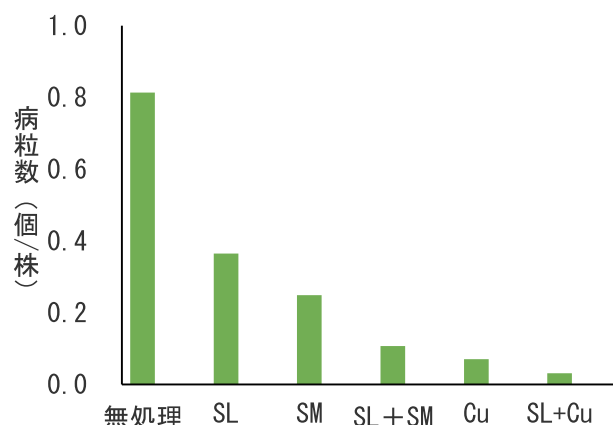


図 転炉スラグと農薬の併用による被害軽減効果

SL：粉状転炉スラグ 移植前土壤混和 300kg/10a,
SM：シメコナゾール粒剤 穂ばらみ期散布 4kg/10a,
Cu：銅粉剤 穂ばらみ期散布 4kg/10a